

## 第百九十八話 大東亜戦争の世界史的意義

日本として、大東亜戦争から、「何を学ぶべきか」と同時に「世界史的な観点からどのように理解すべきか」を考察することも重要である。戦後七十数年を経たが、近現代史が確定したとは言えない。世界的な視点から本戦争を眺めてみると、大東亜戦争の重要な側面が浮かび上がってくるかもしれない。引き続き、小生の偏見と独断で、それらを例示してみたいと思う。

- 1 保護主義国家及び国家群の存在は、世界の安寧にとってマイナスの面が強い。持てる国、持たざる国の決定的な対立に至らないような国際的リスク管理が必要だ。
  - 2 歴史は勝者の歴史であるとの俚諺があるが、敗者にも相応の言い分があり、それは十分に考慮されるべきだ。
  - 3 国家間相互の警戒感、悪感情、嫌悪感は増幅され、負のスパイラルに陥る懸念あり。
  - 4 (国際的) 制裁の一環として、経済的にある国を追い詰めることは、結果的に国際社会にとってはマイナスである。現在においても、経済制裁等は、心理的効果はあるとしても、政体や政策の大なる変更を齎した例は少ない。期待する効果と制裁のレベルがマッチングしていない。厳しい制裁は、逆にリスクを高めてしまうと考えた方がよい。制裁リスクは至当に判断することが必要である。
  - 5 強制力を持った超国家が存在しない場合の、国家間の紛争処理については、紛争相手を極端に追い詰めることは、窮鼠猫を嚙むに似て問題が大きくなる可能性が大である。大国がなりふり構わぬ横槍を通すのであれば、それは逆効果である。“一寸の虫にも五分の魂がある。”を認識する必要性が再認識された。国家も名を惜しむのだ。奴隷の生存を選択した国家は消滅する。
  - 6 国際連盟の無力さが浮き彫りになり、欠陥が明確になった。
  - 7 日本は、日露戦争で薄氷の勝利を得て、白人優越論に風穴を開け、大東亜戦争において、欧米白人社会と互角以上の戦いをしたことで、アジア諸国等に自国近代化の必要性を認識させ、白人に対しての劣等意識を払拭し、自信を与えたと考えられる。
  - 8 大東亜戦争の戦争目的の一つである大東亜諸国の植民地解放を成し遂げ、或いはその契機をそれら諸国に与えた。大東亜戦争は、欧米植民地主義に対する異議申し立てという側面も強い。戦後、欧米の植民地主義に対する国際的な批判が高まった。
  - 9 当時の国際的規範や常識に照らして妥当な国策すらをも否定して、自らの権益増大を図るために、美辞麗句、何者も反論し得ないような理想論を持ち出すことの、不可思議さが理解され始めた。理想論や原則論を振り回すことの愚を知るべし。
  - 10 敗戦国に対する弱体化政策や一方的な史観の押付けは武力征服以上に悪辣であり、民族抹殺にも等しい。また、そのような政策は何れ破綻する筈だ。
  - 11 敗戦国に対する戦争犯罪裁判の妥当性に対する疑義、復讐裁判との認識広がる。
  - 12 国際的に、戦争を如何に規定し管理するか？
  - 13 米国が初実戦使用した原爆の非人道性が明白になり、大量破壊兵器の抑制的管理方策が模索され始めた。
  - 14 国家としての態を為さない国家に対して、国際社会は如何に関与すべきか？ 関係国が夫々の思惑で関与することは、混乱を助長する。統治システム不全、破綻国家、内戦下の国家への国際社会の対応は今なお重要課題であり、解が見えない。
  - 15 国は戦いに敗れても、国民の高いモラル、道義心、愛国心（殉国心）、文化・教育力があれば国家の再建は可能である。
  - 16 過酷な国家賠償は、反発心を惹起する。
- \* 人間の叡智を信じたいものだ。

(第百九十八話 了)